

第46回気象予報士試験で、受験8回目にして合格することができました。
中島先生の授業なしに、合格はできなかったと思います。以下、これから予報士を目指す方に参考になるのではないかと思います5項目を、私の合格体験記としてご紹介します。

1. なぜ予報士を目指したのか

・小学生の頃から山登りが好きで、学生時代からアウトドア活動を続けてきました。社会人となり、取材をして文章を書く仕事をする中で、興味のある分野を強みにしたいと思い、気象予報士を目指そうと思いました。参考書を買って、勉強に取りかかったのは、社会人2年目、25歳の秋。そこから合格の通知が自宅の郵便受けに届くまで、6年がかりで計8回の受験、30歳を超えることになろうとは、思いもしませんでした。

2. なぜ中島先生を選んだのか

・中島先生は、学生時代の友人で先に合格した予報士から紹介してもらいました。仕事柄、毎週固定した時間が取りづらかったため、時間や場所の融通がきく中島先生の授業スタイルを選びました。先生がこれまで合格者の実績を多く出して、気象関係の本も出版していることから、先生の授業をきちんとやっていけば、実力はきっと身につくはずだと信じて選びました。

3. 中島先生の授業はどんなか

・2時間、一対一で学びます。先生から事前に渡された課題を解いておき、それを授業で解答していくのが基本スタイルです。先生は受講者の実力に合わせて、課題の難易度や分量を調整してくれます。私は実技の授業を中心に受けたのですが、基本的には、本番の試験と同様に大問2題が課題となりました。先生のオリジナル問題のことが多かったです。

・先生の授業の特徴は、受講者の実力や人柄に合わせて、一番勉強が進むと思われる方法を取ってくれるところにあると思います。私の場合は、何度も落ち続けたこともあり、受講当初は勉強する気分になりにくい時もありました。そんな時は、授業のはじめ20分くらいは雑談や人生相談のようなことをしていました。先生と「予報士になったら、こんなことをしてみたい」というようなことを話しているうちに、少しずつ勉強する気が戻ってきて、授業時間が結局2時間を超えることもしばしばありました。そんな時でも先生は、私が納得するまで最後まで熱心に授業に付き合ってくれました。「生徒ファースト」が家庭教師をする上での先生の信条なのではないかと思います。

・先生は、解答の導き方を大事にしているようです。なぜその解答になったのか、どう考えたのかということです。解答が合っていたとしても、それが当てずっぽうで合っているのでは、決して力になりませんし、一般や専門は運良く通過できても、実技の壁に必ず阻まれます。私も何度も落ちた経験から、「なぜそうなるのか」ということの大切さは身にしみていたので、授業中は、解答の根拠をよく先生に説明していました。先生は的を得た説明なら「おー、いいじゃないですか」と声をかけてくれた上で、さらにこんな考えもできるよという「おまけ情報」も欠かさずくれました。そのおまけ情報で、気象の理解がぐっと進んだことは数知れません。理解があやふやなところは、わからないところまで戻って、一つずつ教えてくれます。一度で理解できないところは、何度でも聞き直すことができます。こうした対話を重ねて理解を深められることが、独学や大人数の講義型ではできない、家庭教師スタイルならではの、良い点ではないかと思います。

4. なぜ8回目で合格できたのか

・「なぜ」「どうして」を何度も繰り返したことが勝因だと思っています。人によりけりですが、気象予報士試験は、暗記ができれば「一般」「専門」は通過できると思います。ですが、実技はそうはいきません。暗記による表面だけの理解では追いつけない応用問題を解ききる力が求

められるからです。私は予報士試験を勉強する中で気がついたのですが、大学受験の経験から「どんな試験でも暗記すればなんとかなる」という大きな勘違いをしていました。このことが、結果として合格まで長くかかった原因だと思っています。6回目で一般と専門が振り出しに戻った時に、これまでの勉強が誤っていたことを認めざるをえませんでした。そこからは、暗記することはやめ、一つずつのことを、なぜそうなるのかと考えるようにしました。例えば、気象予報士試験では、なぜ「相当温位」という単位が重要なのかということや、なぜ実技試験では発達する温帯低気圧や台風の問題がよく出題されるのか、またなぜこの問題作成者はこんな問題を作ったのか、といったことなど、当たり前のことのように思えても、よく考えてみると、意外とよくわからないことが多くありました。こうしたことを、先生の授業で対話しながら一つずつ確認していくことで、理解が深まり、合格できる力を蓄えていけたのではないかと思います。自分のものの考え方が、「やみくも暗記型」から「なぜ、どうして型」に変わり、物事を深く理解しようとする姿勢を身につけられたことが、予報士試験を通じて得られた最大の成果なのではないかと思います。

5. 最後に

・気象予報士試験は、誰にとっても歯が全く立たないほどの難関試験ではありませんが、1、2か月勉強ただけで、合格できるほど易しい試験でもないと思います。合格後に合格者の集まりに出ましたが、だいたい5回前後受験したという例が多かったように思います。私もそうでしたが、あともう一步の時間が続くと、ふとしたときに「自分は本当に合格できるのだろうか」「予報士を目指したこと自体、間違ってたんじゃないか」といった不安を感じることも少なくないかもしれません。人によって、予報士を目指そうと思った動機はそれぞれだと思います。私の場合は、誰からも予報士になった方がいいと勧められたわけでもなく、会社の人からは、なっとうするの、といった冷ややかなことを言われたこともあります。それでも、自分が好きだと信じ、自分の意志でやろうと決めたことを、なんとしてでもやり遂げたいという一心は最後まで固く持ち続けていました。2016年10月7日の夜、郵便ポストに入っていた一通のハガキの封をめくり「上記の受験者は、第46回気象予報士試験に合格したことを証明する」の一文が目飛び込んできた時、嬉しさとホッとした気持ちで、スーツ姿のまま玄関先に崩れ落ちました。数分後に中島先生に連絡。1コール目でつながり、吉報を伝えると「受かると思っていましたよ」と静かに受け止めてくれました。私は先生を信じて勉強してきましたが、先生も僕を信じてくれたのだと知り、本当に嬉しく思いました。7回落ちて6年かかっても、勉強方法を見直しながら、合格の頂に達することができたこの経験は、今後の人生にとって何にも代えがたい確たる支えになることだと思っています。

最後になりましたが、中島先生、本当にありがとうございました。